

沼津市若山牧水記念館

第13號

1994.11.15.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559)62-0424

石川啄木の死と牧水の葉書

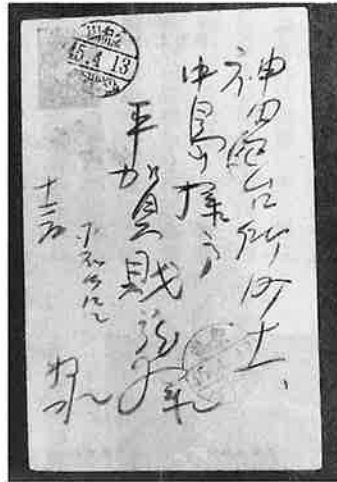
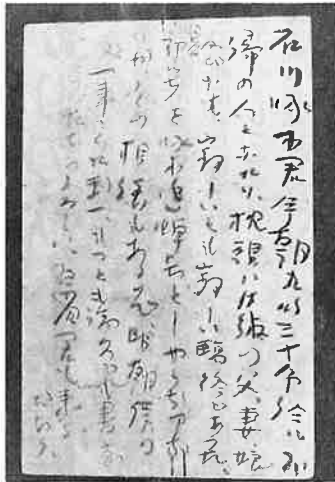
四月十三日、小石川より、神田区、平賀
財藏様(葉書)

石川啄木君今朝九時三十分終に不帰の人となれり、枕頭には彼の父、妻、娘及び小生、寂しいとも寂しい臨終であった。

自然初号を啄木追悼号としやうぢアないかその相談もあるので、明朝僕の処へ来てくれ玉へ、もつとも論文でも書きかけてゐたならよろしい、原田君もくるだろう。

十三日

牧水



牧水より平賀財藏宛葉書

この葉書が初めて一般に公開されたのは昭和五十三年の秋、牧水没後五十年に東京新宿の小田急デパートが企画開催した記念行事、「若山牧水展」のときである。この一枚の葉書の前で、私も釘付けになった記憶がある。

明治四十五年四月十三日の早朝、牧水は啄木の妻の節子から夫が危篤だという知らせを受けた。取るものもとりあえず駆けつけてみると、昨夜から昏睡状態が続いていて、先に来ていた同郷の金田一京助が心配そうに枕元に座っていた。しばらくして意識の戻った啄木は牧水を見てようやく微笑みを浮かべ、世話になってる礼などと言った。そして、牧水がもう大丈夫だしっかりしたまえと声をかけると、啄木はにっこり笑ったが、しばらくして「死にたくない」と言った、という。臨終の二、三時間前のことである。

この時期の牧水の言動はきわめて複雑難解である。信州広丘村まで太田喜志子を訪ね、唐突過激に結婚したい旨を告げ、相手をびつくりさせたのが十日前の四月二日であった。しかも、牧水はこの少し前、園田小枝子という五年越しの恋人を諦めたばかり、心身ともに傷ついて、絶望のどん底にいた時である。前の年の春には「かなしくもいのちの暗さはまらばみづから死なむ砒素をわが持つ」などと危うい歌を作っており、それから一年もたつていない。そのような時に遭遇したのが、このかけがえのない友の死であった。

つまり、失恋の挙げ句混濁して「死にたい」と歌うまで思いつめ、毒薬を持ち歩いていたような牧水の前に、「死にたくない」と言いながらそれでも悔しく死んでいく同年の若者がいたのである。それも「自分は病気で死ぬのではない、貧乏に殺されるのだ」と告げている資質秀でた親友が、である。

この葉書は啄木の死を見送った後医者へゆき、電報を打ち、葬儀屋へ走るなどして葬儀のための準備万端を整えてから、下宿へ戻って書いたものだ。この夜は葉書の外にもう一通、長い手紙を書いている。信濃の太田喜志子宛てである。その中に例えば「あなたも睡る気持、私も睡る気持、一切を超越して添寝の日を続けませう、ね、さうませう」というくだりがあり、人恋いの激しい渴きを訴えている。末尾に「石川啄木君が今朝の九時半に死にました(中略)今夜もこれから行って通夜です」とあるところから、「通夜の恋文」などと言う人もいる。

小田急の展示以後葉書の方は所在が分からなくなっていた。沼津市に牧水記念館が出来たとき、特別企画展に展示しようとおちこち探し回ったことがある。結局盛岡の「手紙館準備会」が管理していることが分かり、盛岡市立図書館の小森一民館長に事情を話して借用したという経緯がある。現在当記念館に展示されているのは、その時許しを得て作らせてもらったレプリカである。

(上田治史)

沼津ゆかりの歌人歌集展

沼津牧水会と沼津市教育委員会共催で七月二十六日から八月二十八日まで当記念館ラウンジで特別展「沼津ゆかりの歌人歌集展」が開催された。今回の特別展は、須永実行委員長を中心として一年以上をかけて資料集めに奔走し、開催にこぎつけたものである。万葉から現代まで、沼津市にゆかりのある歌集や歌会にちなむ古文書など約百点を一堂に集め展示し、作者をパネルで紹介した。万葉集に収められた、上香貫に住んでいたと考えられる玉造部広目の一首をはじめとして、年代順に作品を並べることで、各年代における短歌の位置付けも「詠みとれる」配置となっていた。時代もさがり、江戸末期の国学者やこの地方の網元、名主などの特権階級の「文化的たしなみ」として詠まれた歌集、古文書も現代語に読みかだし展示され、続いて明治に入り「沼津風（ぬまづぶり）」を発行した沼津短歌会の生活に密着した写実的な内容への移行も分るようになっていた。当時の沼津短歌会の中心となった楨不言舎の「不言舎集第一巻」や、初代沼津市長を務めた和田伝太郎氏の「虫聲如雨」など、さらに、戦後の沼津短歌の興隆を担った多くの歌人の作品も紹介されていた。「東海短歌」の創設者 故積惟勝氏の「伴侶」や「山脈」の創設者 故伊藤祐輔氏の「見蛇楽」も出品され、この他、福島泰樹氏の「さらばわが友」、アララギの「落合京太郎歌集」などがパネルで紹介され、その他、大中寺所蔵の入江為守氏の「沼津十景」を詠った屏風も展示され、来場者の興味をひ

いた。なお歌人城直樹氏の記念講演「明治期の沼津短歌会と楨不言舎」（次頁に掲載）が展示中、当記念館会議室で開かれた。

城 直樹

歌人、本名関口昌男。日大三島高等学校教諭。

歌集「朝明けの海」「冬の鷹」。

著書「中村憲吉とその周辺」。

いた。当時の沼津短歌会の中心となった楨不言舎の「不言舎集第一巻」や、初代沼津市長を務めた和田伝太郎氏の「虫聲如雨」など、さらに、戦後の沼津短歌の興隆を担った多くの歌人の作品も紹介されていた。「東海短歌」の創設者 故積惟勝氏の「伴侶」や「山脈」の創設者 故伊藤祐輔氏の「見蛇楽」も出品され、この他、福島泰樹氏の「さらばわが友」、アララギの「落合京太郎歌集」などがパネルで紹介され、その他、大中寺所蔵の入江為守氏の「沼津十景」を詠った屏風も展示され、来場者の興味をひ



明治期の沼津短歌会と榎不言舎

城 直 樹

明治の末年に沼津の医者で歌人の榎不言舎がいたことは、いま忘れられようとしています。

東都で「アララギ」を主宰した伊藤左千夫をはじめ、長塚節、島木赤彦、斎藤茂吉、中村憲吉らを結集させて、往時の歌壇に雄躍しようとする兆しをみせた歌誌「アララギ」に連なる沼津の医師榎不言舎こそ「沼津短歌会」を率いる人物でした。それにまつわる断片的な話は聞かないでもないが、系統的なことは寡聞であります。

さて、明治期の沼津短歌会と榎不言舎についてその一端を紹介したいと思います。

これから、榎不言舎の出自とその人となりについて、「アララギ」の伊藤左千夫と沼津短歌会および榎不言舎について、沼津短歌会とはどのような歌人集団であったのかなど、以上三点についてお話をしようと思います。

まず榎不言舎の出自から触れてみようと思います。榎さんの墓が沼津市斎場そばの共同墓地の一角にあり、「榎の墓」といつて縦約二メートル、厚さ約十センチ程の立派な墓石の左横に次のように刻まれています。「墓碑は森鷗外野口英世蘇軾の筆であり、昭和二十七年十二月建榎正男」とあることから、墓碑の「榎」の書体を文博なおかつ医博の森鷗外の筆跡。

「の」のひらがな一字は、世界的に有名な細菌学者で医博理博の野口英世の筆跡。「墓」の文字は宋の詩人、いわゆる唐宋八家で知られる蘇軾の筆跡からそ

れぞれ集字し、刻字されたものであります。

これは榎不言舎の長男の榎正男氏が父不言舎の生前からの遺志を継いで実現したものであり、殊勝な息子の顧慮に感服するところです。ちなみに榎正男氏は、東大医学部卒、医学博士で、かつて沼津市教育委員長等その他多くの要職を歴任、勲五等、久しく歴代の医院長として榎医院を継いできたが、すでに物故されました。

また一方、榎不言舎の出自を知る手がかりは、沼津市片浜の臨濟宗正覚禅寺の墓地に「榎大人碑」もあります。その墓碑銘によりますと、次のような事実がわかります。榎不言舎の父については、「君（不言舎父）中野氏幼名勇喜後改正覚字子成号得庵云々」——不言舎の父正覚は中野氏の出で、幼名を勇喜のちに改めて正覚、さらに得庵とも号したということです。さらにその生年月日が、天保十一年三月六日、我入道村で生まれたと刻まれています。この正覚は十八歳で出生地我入道村を出て榎家を継ぎ、江戸期の末年に当時有名な馬門先生の塾に入り、漢学筆法を学んだことがわかります。その学問をもって、自ら生徒を集めて教授するとともに、その傍ら医学を学び、明治初年の沼津医院にて医術の修業をも重ね、自家に開業したというのであります。

その結果は遠近の患者が集まり、感謝され、懇切な治療ゆえに世評を博したとのこと。正覚の人々が温良で、父母を敬愛し、孝行を尽くすとともに、

に、医業に精進する一方で、詩文と竹本草木花を栽培するなどの趣味をもっていたとのことであり、正覚の最晩年は、最も国歌、すなわち和歌と酒を好み酔態を見せることなく、快豁で人を喜ばせるところがあつたというのです。正覚は鈴木家から妻を迎え、長男が豊作（不言舎）、次男が岩太郎で平山家（蘭契社）を継ぎ、三男が貞治、四男が繁清（遠藤家婿入）、長女元は静岡河島家へ適帰し、次女元はまだ嫁がなかつたのです。

この榎正覚は、明治三十一年七月二十八日に病没するのですが、神式によって「伊賀志五百枝大人命」と号されました。榎正覚はその折の辞世として、次のような国歌、すなわち和歌を残したのであります。
吾心安久駿河能富士乃根乃後尔甲斐有留世
遂去利計留

と万葉仮名の用法の一字一音の表記意識があります。この「甲斐」は、富士の向こうの甲斐、つまり遠い他国の甲州の国と冥府の意と、いままでこの世に生きて証をたてた効果のあるはず程の意を懸けていると思われまふ。すなわち、滅びゆくわが命を惜しみ、遠い冥府へ旅立つ無念を詠んでいる一首も刻まれた



榎の墓

のであります。そしてこの「楨大人碑」の最後のところに次のように書かれています。

維行主敬維業主仁吾祖薰陶乃得其人幽宮
安置東海之浜老松翁壽永護其魂

明治三十三年七月二十八日

友人西尾林道撰併書
男 豊作 建之

以上のように、友人西尾林道とは、馬門先生すなわち西尾麟角の息で、正覚とは同門、しかも、明治の初年に私塾修成舎で教員となり、子弟の教育にあたった同志でもありましたので、このように「楨大人碑」の「撰併書」を快諾したに相違ありません。親しみをこめてなお具体的出自をも踏まえての漢文による墓碑銘は、必要にして充分な楨正覚像が述べられて余すところがありません。

この「楨大人碑」によって、不言舎の父正覚の人となりが理解されると同時に、その亡父の遺訓を受容したであろう不言舎の穩健で篤実にして高尚高邁な人品卑しからぬ人物像が彷彿してくるに相違ないと思われまふ。それに医業にも歌道にも熱心で孝行かつ人情にあつことは言うまでもありません。

楨不言舎は本名を豊作といい、不言舎の号の由来は、有名な「桃李不言下自成蹊」——史記李將軍列伝贊の「不言」——不言実行にも通ずる一方ものを言わずとも、桃李の木の下には自然に人が集まり、自然に蹊がでできるの意にちなみ、「不言舎」と自称したものと思われまふ。また俳句や漢詩の自作の署名には、好んで「桃蹊」と記したのもその箴言によつていと考えられます。本名の「豊作」より「不言舎」または、「桃蹊」の方が、はるかに格調の高い印象を与えられると思われまふ。なお「不言舎」を

訓読みの「イワズノヤ」とも読ませているようですが、文学的観点からみて、やはり「フゲンシャ」と音読みの方が詩歌人にはふさわしいと私は思う次第であります。

明治期の沼津をこの楨不言舎を中心に歴史的な流れの中でその動静をあわせながらみていきたいと思ひます。

明治期の沼津略年表—資料—

- 明治元年 水野藩主水野忠敬菊間へ移封。沼津兵学校設立。六月十四日楨不言舎（豊作）生まれる。明治天皇即位、五ヶ条御誓文公布。
- 二年 横町伝馬所にて日本最初の郵便事業開始。
- 四年 廃藩置県。
- 五年 学制公布。鉄道開業、陰暦より太陽暦採用。電信局設置。消防組結成。
- 六年 警察事務開始。小学校集成舎開校。徴兵令布告。キリスト教解禁。江原素六が牛乳売捌所を設置。
- 七年 竹陰舎で楨正覚と西尾林道が共に教員と



楨大人碑

九年 不言舎と竹馬の友選塚麗水（金太郎）が上京。沼津治安裁判所開設。湊橋（現御成橋）開橋。廃刀令公布。楨をい六月十九日出生。

十年 西南の役。江原素六が積信社設立。

十一年 不言舎の弟貞治が四月十八日出生。

十二年 駿東郡沼津町誕生。初代江原素六が郡長となる。黒瀬橋落成。

十四年 自由党の結成。沼津銀行の設立。沼津新聞創刊。

十五年 日本銀行営業開始。

十六年 一月に正覚の兄中野啓覚が東京大学別科を了えて医師免許状を取得。六月五日歌誌「馬酔木」創刊。

十八年 三月、六代松の公園に「馬門踏入碑」代表者間宮喜十郎らと建立。楨正覚の名も刻まれる。内閣制度開始。

二十年 沼津地方に洋服流行。東京電灯会社設立。電気が点灯。

二十一年 蛇松線敷設。沼津治安裁判所に登記所開設。市町村制の公布。

二十二年 東海道線沼津駅設置。沼津町役場発足。同町長山形敏雄就任。大日本帝国憲法発布。

二十三年 教育勅語下賜。

二十五年 不言舎は東京の済生学舎を了え、沼津に帰郷、楨医院を開業。

二十六年 沼津御用邸を造営。皇太子殿下初めて行啓。

二十七年 日清戦争開戦。十月十日、不言舎の伯父

中野欽吾逝去。
二十八年 根方銀行が岡野家によって創立。

三十年 沼津町内に赤痢流行。台風による被害甚。不言舎と大塩学道(平作)との文学的交流がはじまる。

三十一年 夏、大洪水浸水約三百戸、湊橋・黒瀬橋流出。七月二十八日不言舎父榎正覚没。

三十二年 沼津町立沼津商業学校設立。

三十三年 永代橋竣工。治安警察法公布。七月二十八日、榎正覚(不言舎父)の祥月命日にちなみ、西尾林道文撰にて「榎大人碑」を不言舎が建立。

三十四年 私立駿東高等女学校創立。沼津に赤痢が流行死者続出。不言舎ら歌仲間と四月一日桃郷の桃の花を見て遊ぶ。

三十五年 静岡県立沼津中学校設立。日英同盟成立。不言舎の歌友柳本城西が医師免許状を取

得。

三十六年 六月五日付歌誌「馬酔木」創刊。十一月、間宮黄庭方で、「沼津短歌会」設立。大洪水で湊橋流出。幸徳秋水らの平民社設立。

三十七年 東郷大将上村中将来沼。二月八日、日露戦争開戦。

三十八年 大山元帥来沼。沼津の街をあげて大歓迎、一万五千人の出入。三月十一日、伊藤左千夫が来沼。八月七日にも左千夫来沼。

三十九年 一月に沼津に大雪害、五月に濁水。沼津―三島間電車開通。日本社会党が結党。

八月十日伊藤左千夫が来沼、歌会開催。

四十年 電話開通。千本浜公園開園。十一月伊藤左千夫が来沼。木村秀枝宅へ泊。

四十一年 四月一日、伊藤左千夫が榎不言舎宅訪尋。

十一月八日、伊藤左千夫が不言舎を訪問、論談風発。この年五月十日、木村秀枝が結婚。十一月九日、信濃のアララギ歌人望月光男が来沼。榎不言舎を訪問。二月一日、歌誌「アカネ」創刊。十一月「阿羅々木」創刊。

四十二年 九月一日付、「阿羅々木」の漢字表記の表紙から平仮名表記「アララギ」と変更。編集発行人が伊藤左千夫となる。根岸系歌誌「アカネ」が三井甲之に委ねられる。

四十三年 沼津停車場に自動電話設置。沼津の町の中に自転車が普及。韓国併合。志賀直哉らによって、「白樺」が創刊。十月九日、不言舎が盲腸炎で、東京の佐藤外科へ入院手術。

四十四年 沼津に大雨襲来、浮島地区河川決壊。六月一日、平塚雷鳥らが「青鞥」を發行、「原始女性は太陽であった」の名文句が流行。

四十五年 沼津役場新築。七月三十日、明治天皇崩御。七月三十日、天皇崩御により、皇太子嘉仁踐祚、大正と改元。

この略年表は、なるべく榎不言舎にかかわる事項を重点に、沼津とその時勢と人と文学を視野に入れながら試作したものであり、政治経済文化等々の基本的な手法によるものではありません。

この年表で榎不言舎をみますと、不言舎は明治元年六月十四日、榎正覚長男として出生。少年時代より頭脳明晰、学問を好み、趣味も高尚

だったことが解ります。県立になる以前の沼津中学校で学び、上京して時の済生学舎で医学を修め、明治二十五年沼津に帰郷、内科眼科の診療所を開業以後生業に励みながら、父正覚の遺薫を忘れることなく、漢詩をはじめ詩歌を唯一の娯楽として、終生の道にもかかわったのであります。明治三十年代の沼津地方に蔓延した赤痢の疫病の治療に奔走する不言舎の活躍ぶりは、「榎日記」によっても明白なところですが、その一方では、同年あたりから、往時の私立駿東高等女学校教諭の大塩学道(平作)らと榎不言舎との文学的な交流がはじまったのであります。特に不言舎の弟平山岩太郎が蘭契社を継ぎ、書籍新聞等を扱う書店を営んでいた関係もあって、親しく出入りしていました。明治半ばに、新聞「日本」をそこから入手していた不言舎は、正岡子規の俳句や短歌に触れ、いち早く句や短歌を投稿していたのです。明治三十一年七月二十八日、父正覚がはからずも病没。数年後にその亡父を供養して不言舎が、「榎大人碑」を建立、篤い孝養ぶりを示しています。新聞「日本」ならびに「国民新聞」をはじめ、歌誌「心の花」等にも投稿しており、中央俳壇歌壇と関わる契機となる過程で、不言舎生来の文学好きに拍車がかかったといえましょう。明治三十六年には子規系譜の文学を継ぐ、短歌雑誌「馬酔木」が創刊、かねて新聞「日本」で伊藤左千夫の投稿の選を受けていた不言舎であれば、創刊と同時に親しい蘭契社より定期購読すると同時に、沼津短歌会第一回歌稿を左千夫に送り、左千夫の配慮で、「馬酔木」第七号(明治36年12月23日発行)に掲載されたのであります。それ以後も沼津短歌会の詠草は久しく断続的に発表され、「アララギ」にもそれは引き継がれてゆき

ました。

沼津短歌会発足当時を回想して、「アララギ」二十周年記念号（昭和8年1月1日発行）で不言舎自ら次のように述懐しています。

沼津短歌会は明治三十六年十一月の創立で間宮黄庭方に於て呱呱の声を挙げた。当時会員には池谷観海、横川有信、公野利文、大塩学道、木村秀枝、間宮黄庭及び予等があつた。毎月一回課題を出して詠歌を集め、無記名にして謄写刷にして会員に分布して各佳と認めしものに特号を付して会場に出して採点する事にした。其の後漸次会員も増加して遠州の柳本城西、静岡の木村良玄、榎繁清（後の遠藤繁清）も加わり、不言舎の土蔵の二階が八畳に六畳敷ので夫れに移り、三十九年の夏には短歌の講習会を開いた。聴衆は意外に多く室に充満した。

其の後左千夫先生に原稿の批評を願ひ、快諾を得て毎月批評して下さい、其の後アララギ発行の機運が来りて、其の第二号より会稿を掲載して頂いた。

とあつて、沼津短歌会の産声が聞こえるのであります。このようにその当時、伊藤左千夫が東都から御殿場經由の汽車に乗つてはるばる沼津にやつて参ります。

明治三十八年三月十一日 左千夫来沼。

明治三十八年八月七日 左千夫来沼。

明治三十九年八月十日

左千夫来沼。不言舎宅で歌会感動。沼津の風光を愛好する。

明治四十年十一月

左千夫来沼。木村秀枝宅泊。

明治四十一年四月一日 左千夫が不言舎宅を訪

問。論談風発する。

明治四十一年十一月八日

左千夫が不言舎宅を訪

尋、歌論を大いに語る。

以上のように伊藤左千夫は沼津に都合六回来ており、主に榎不言舎を頼りにしての来訪でありましょう。一地方の沼津の熱心な教養の高い歌人と会う喜びを左千夫は冥利に思つたに違ひなく、沼津人の人柄の善良さをほめています。そこで沼津の風土や土地柄を左千夫は「和楽の地」と呼んで感激しているのがあります。比較的波静かな駿河の海、内浦の海に老松の続く千本松原に、遠景近景も美しい富士の雄姿を仰いで感動しています。左千夫は千本松原の歌も多く詠む一方で、小文「千本松原」を書き、東都の友人に沼津行きを盛んに奨励しております。

明治末年の「アララギ」を調べますと、不言舎をはじめ、沼津短歌会としても、同誌発行の義損金一寄付を再三行つておりますのも、まことに殊勝なことといえましょう。それだけのことではなくて、沼津短歌会という一地方での文学的意欲の高揚と、具体的創作活動への貴重な前進が窺われる一種の証左でもあると思われれます。日本の歌壇へ関わる絆がそこにみられましょう。沼津短歌会の存在意義もその辺にもあるのではないかと考えられます。

沼津短歌会の会員は、不言舎をはじめ、横川真古文・大塩学道・間宮黄庭・榎繁清・木村良玄・公野利文・亀山登野次・阿部守義・徳永無得・柳本城西・高橋謙三・大川渉・木村秀枝・池谷観海ほかの名がみられております。明治四十一年十月二十五日発行の同歌会の作品を収録した『沼津風』^{ぬまつぶかぜ}もあります。紙数の関係から詳細は省きますが、非売品で蘭契社発行



左千夫(右)と榎不言舎(中央)、横川真古文(左)

でした。概ね同短歌会の傾向は古風で、保守的な素材と表現が目立ち、左千夫はその点を常々指摘するとともに不満を伝えていました。しかし有力メンバーの木村秀枝のごときは、そのことに反駁しており、不言舎も「地方風味」などと自認し、むしろ地方色を矜持しておりました。

明治末年の日本歌壇における「アララギ」歌風さえ古風な写実主義との非難を受けていたわけですから、沼津短歌会の作品の傾向が奈辺にあつて、どのような評価づけをされていたか想像に難くないことでもあります。

しかしながら、東都から遠く離れたこの一地方の沼津の町に、文学的活動の機運とその萌芽から、久しく中央誌「アララギ」につながる短歌集団の存在意義は価値づけられるべきことと思われれます。